

早稲田大学博士論文(審査報告書)		
2004	学位記	文科省報告
	3874	甲 21912

## 博士学位請求論文審査報告

審査対象論文：前田繁樹『初期道教経典の形成』

前田繁樹氏によって提出された論文『初期道教経典の形成』は、およそ後漢中期から東晋末の間に、つまり西暦2世紀後半から5世紀はじめの間に成立したと考えられる一連の道教経典の形成に関する研究である。言うまでもなく、ここで焦点が当てられる時代は、道教経典としては最も古層に属する文献群であり、したがって本論文は中国における道教そのものの来歴を問い直す研究といえることができる。

論評を加えるに先立って、まず順を追って各編の中心をなす論点を、以下に示したい。

**第一編「太平経の研究」**は、現行の『太平経』が果たして後漢の「太平清領書」の伝本か、との疑問を提示し、『太平経』の来歴を掘り下げる。従来の説を周到に整理検討した上で、現行本の成立過程に関する自説を提示する。

**第二編「老子化胡経の研究」**は、老子が西方で釈迦に変身し、仏教を開いたとする化胡説について問い直しをはかる。化胡説は、従来、仏道論争の場面でのみ取り上げられることが多かったが、化胡説前史を文化史的に探り、こうした説がいかなる階層で展開されたのか、信仰の形態の諸相を示す。初期の「化胡経」は失われていて、周辺についての論議に終始するのは残念であるが、化胡説に対する新しい視点を指し示している。

**第三編「老子西昇経の研究」**は、従来、考察の対象となることの少なかった『西昇経』に関する、初の本格的な研究である。歴代の著録や注釈に関する書誌学的問題を扱い、現行諸本を勘案して校本作成に及び、次いでその思想的立場を探究する。その結果、本書の成立年代は東晋中期以前であるとの結論が導かれる。

**第四編「老子中経の研究」**。『老子中経』は、身体各部位に宿る体内神の内観である「存思」を描く経典。つとにフランスのアンリ・マスペロがその有名な著作『道教』の中で紹介した経典としても知られるが、その形成の過程や、成立時期の問題は手つかずのまま残されていた。本編では、一連の関係文献を検討しながらこの経典の成立に至るまでの諸系譜をたどる。成立過程に加えて、本経典を『黄庭（外景）経』に対するマニュアルとする創見は斬新かつ十分な説得力を帯びている。

**第五編「天師道の展開」**は、前漢末から東晋末に至る道教成立の歴史的試行錯誤ともいえるべき過程に重層的にメスを入れた考察。早くも前漢末から、多くの職業的宗教者によって、民間の信仰形態が変容し、従来の鬼神信仰に整理が加えられていった点が指摘される。ここに、氏は道教の立脚点の萌芽が育まれる土壌を見出す。次いで東晋末に孫恩・盧循の乱の母体となった天師道集団の創始者、杜子恭とその子孫の伝記資料を集成し、その人的関係の広がり示す。さらに、従来、様々に論じられてきた「大道家令戒」の成立時期について、氏はこれを東晋末に杜子恭によって述作されたものと推断し、その述作動機に一念な考察を加える。特殊な歴史的文脈の中で発生したと見られる杜子恭による経典相互の関連づけは、きたるべき後の道教経典結集運動の指針である三洞四輔の先例とも言うべき

一事例であり、道教の重要な条件の一端が、杜子恭に構想されたと見る。

附編「初期道教經典をめぐる諸問題」には三篇の論考が収められている。「敦煌本と道藏本の差異について」では、敦煌本と現行本を比較して、仏教用語を多く含む敦煌本にそのオリジナルを求める。「業報と注連の間」では、道教の応報観に中国の伝統的応報観と仏教の応報説とが混在することを指摘。「所謂「茅山派道教」に関する諸問題」では、従来、六朝道教の主流派は、陶弘景を中心とする上清派道教であるとみなす見解があり、陸修靜までもが茅山派であったかのような認識があったが、ここではその見方を批判し、むしろ陶弘景の立場の特殊性を指摘する。以上の三篇は、時代としては三洞四輔成立以降に属するものの、組織的な道教の胚胎過程が呈する錯綜状況を指摘しているという点で、上記諸篇との連続性が認められると考えられる。

本論文には、『西昇経』や「老君一百八十戒」を論じた諸篇のように、すでに日本のみならず世界の学界で極めて高い評価を得て定論となっている論説が含まれており、それだけでも充分評価に値するものである。しかし、本論文は同時に、前田氏の道教形成史に対する独自の観点が遺憾なく発揮されている点が更に注目される。従来の道教研究においては、完成された道教を基準として、歴史の中に道教のアイデンティティを明確化する要素を見出すことに主眼がおかれてきた。それに対して、前田氏は、道教の展開に関わる宗教者の立場が、その形成期にあっては多様であり、道教とも仏教とも截然と分け隔てすることのできない多くの萌芽的様相が存在したことに注意する。「さまざまな理解度の、さまざまな宗教者や信者が、さまざまな立場で、仏教側で、道教側で、その間で、中央で、地方で、その間でひしめきあっていたはずである」（一五〇頁）という言葉には、氏の視点が最も端的に表れている。ここでは、道教經典に見える仏教語の使用は単なる仏教からの借用や影響としては片づけられず、『西昇経』をはじめとする經典の生成も、むしろ、古訳時代に仏教思想が生成されてゆくと同様の原理にもとづいて生起する平行現象として位置づけられる。このような、仏教受容の波に洗われている中国宗教思想のダイナミックな展開全体の中に、改めて道教の生成を位置づけようとする観点は極めて有益である。なお、「大道家令戒」の成立については、試論の域を出るものではなく、多くの検討の余地を残すかに思われるが、立論の過程における杜子恭と杜治についての考察は重要かつ独自の研究であり、この点は正當に評価されねばならない。総じて、日本のみならず、フランス、オーストラリア、アメリカ、中国大陆、台湾をはじめとする世界の学界に新たに有益な視点を提示し得る論文として高い評価を与え、博士学位を授与するに値するものと評価したい。

2004年10月15日

主任審査委員 早稲田大学教授 福井 文雅（文学博士・早稲田大学）  
早稲田大学教授 小林 正美（文学博士・早稲田大学）  
早稲田大学教授 土田健次郎（博士（文学）・早稲田大学）